【福島大学の大学生との交流】

○震災当時の様子について

（赤岩　大学3年）

福島県は大きく分けて太平洋に近い方から、浜通り、中通り、会津地方と区分されており、地方により震災の被害には大きな差があったようです。最も被害が大きかった地域が浜通りでした。今回お話を伺った大学生の中には、震災当時浜通りに住んでおり、避難を余儀なくされた方がいらっしゃいました。

震災当時、小高に住んでいた方は、震災が起きた翌日の3月12日に放射線の避難区域に入ったため避難せざるを得ず、相馬の体育館に避難して一夜を明かしました。その翌日から4月に入るまでの約1ヶ月間は幸いなことに宮城県の親戚の家に身を寄せ生活することができたそうです。その後は、親戚の手助けもあり、仙台に家を借り小学校に通うことができ、そのまま高校を卒業するまで仙台で過ごしました。震災以前に通っていた小学校の同級生とは連絡手段がなく、今でもどこでどのように過ごしているのか知る由もないといいます。彼の周りには、いくあてがなく、何日間も施設で過ごす等辛い日々を過ごされた方も少なくなかったようです。いつも通り学校に通い、もうすぐ新学期だと楽しみにしていた日常を切り裂くように起こった東日本大震災。これは、絶対に風化させてはいけない出来事だと改めて強く認識しました。

このお話をお聞きして、このような出来事は日本全国どこで誰もが経験する可能性があると思いました。皆さんも自分に置き換えて考えてみてください。生活を送っている見慣れた町で、誰もが予期しなかったもの、むしろ地域を活性化させてきたものから日常を、友達を、地元を奪われる怖さを。私が住んでいる九州にも玄海原発があり、他人事と思っている場合ではないと再認識することができました。しかし、同級生の中には、福島の原発事故を知らない人はいないものの、玄海原発があることすら認識していない人は少なくありません。福島の原発事故をどこか遠い場所での出来事だと思っているからです。これらを踏まえて、福島の復興は福島だけのものではないのではないかと考えました。私は、原発再稼働については消極的賛成です。稼働するためにはまだまだ解決すべき問題が山積みです。それを無視して稼働することは言語道断です。しかし、震災を受け大きな被害を受けたからこそ、安全性をどこよりも追求し、稼働することこそ復興と言えるのではないでしょうか。事故が起こった事実を変えることはできません。しかし、日本でまだ稼働している原発の事故を防ぐことはできます。今稼働している原発の安全面は本当に大丈夫なのか、もし事故が起き、被害を被る可能性のある地域の住民には福島の原発事故を踏まえた正しい説明をし、それを踏まえた上で住民の意見はどうなのか調査するなど責任から逃れない対策を行ってほしいです。そのために、福島で起こった原発事故について勉強し、一人でも多くの人に原発についての意見を持ってもらうことが重要であると考えました。今回の交流を通して、事実を、当事者の思いを、「知る」「学ぶ」ということは大きな一歩であると実感しました。遠くで起こった出来事を自分ごとと捉えることは簡単なようで難しいです。まずは、私自身が福岡の一大学生として原発について学び考えを深めていきたいです。

○被災地・福島の今

（古賀伊織　大学3年）

〈災害対策について〉

・主に地震・火災の避難訓練を行っている。大学やアルバイト先でも行われているが、原発事故の避難訓練は行っていない。

〈放射線について〉

・公園にあるモニタリングポストは日常に溶け込んでいる。原発への知識はあまり無いため数値の意味をよく分かっていない。

・事故後の福島第一原子力発電所に見学で訪れた。痛い、体調が悪いなど、放射線の被害の感覚は全く無いのに、身体は冒されているという事実は不思議だった。

〈身近に感じる復興〉

・水産業が復活し、東北産の魚がスーパーマーケットに並んでいるのを見たとき

・福島県産の農作物への偏見は周りでは特に無い。バラエティ番組でもよく紹介されている。・震災により崩壊した家屋が修繕・取り壊されているのを見たとき。

〈政府の復興への対応について〉

・望んでいることとズレていると感じることがたまにある。

震災から12年、今回の訪問で福島出身の大学生の方から、直接今の福島について聞くことができました。原発事故から12年が経った今でも、福島県の公園には遊具の隣にモニタリングポストと呼ばれる放射線量の測量機が置いてあります。福岡に住む私から見ると、それは異様な光景でしたが、福島で生活をしている大学生らには日常として溶け込んでいるものであり、設置されていることに何の違和感も持たないとのことでした。また、全校生徒や地域での震災に関するイベントもあまり無いとのことで、特に原発については学んだり話し合う機会は少ないため原発そのものへの知識もあまり無いそうです。被災地である福島で震災について知る、考える機会が少ないのはとても驚きました。しかし、その一方でニュース、講演会を通して被災について学ぶ人も多く、また、福島の大学に東京や沖縄など県外から被災地の今を学びに来る学生は多いそうです。今回交流させていただいた学生の中には、台風の被害を受けて防災に関心を持ち、そこから福島について知りたいと思うようになったという方もいました。

一方で復興への政府の対応にズレを感じる、という意見には、私もそう思いました。震災で被災し、政府によって再興された道の駅に今回訪問しましたが、そこにアーティストが設計した1千万円のベンチが設置されていましたが、本当にこれは正しい復興へのお金の使い道といえるのでしょうか。

震災を直後に生まれた子どもも12歳を迎え、全国的に、福島県でさえも震災のことを学ぶ機会が減り、被災地の今について知る人が減っていく一方で、学ぶ人も増えています。復興のためには、ただ新しい建物や高額な公共施設を建てるばかりではなく、やはり福島の今を1人でも多くの人に知ってもらうことが大切です。福島の大学生は、「被災地の現状、住民の想いなどを直接見たり感じたりしてほしい。まだ復興は終わってないことを知ってほしい。」と語られました。そのためにもまずは学ぶきっかけとして、情報発信や復興に向けてのボランティア活動を行うなど、私にも、私達にも被災地の復興のためにできることをしていきたいです。

○再稼働について

（大島妃南子　大学二年）

Q再稼働の声についてどう感じますか？

A・再稼働してもいいが、きちんとした対策をしてほしい。今のままでは反対。

・対策さえしてくれるのであれば、考えようによっては賛成。対策を怠ったため今回の事故が発生した。

・原発は働き口となるため、悪い面だけではない。原発の廃棄物の問題にもっと焦点を置き、安全性の確保ができれば賛成。エネルギー問題の観点からもそう考える。

・対策や安全面と言っても難しいのでは。火力発電などでは電力は補えないとは思うが、現時点では反対。

・消極的賛成。ほかに手段がない。やらざるを得ない。正直、日本のエネルギー問題などを考えるとしょうがないのでは。逆に、私たちレベルではどうにもならない。反対の声も挙げることはできるが、その場合どうすればよいのか。

安全面や対策の面では、ほとんどの方が反対意見を示していました。しかし、現実をみると、賛成せざるをえないといった考えが目立ったように感じました。震災を経験し、福島に住んでいる学生の方ということから、私は反対意見が多いのではと予想していましたが、意外な結果でした。再稼働に関しての考えは、福島県内で住んでいる地域によっての偏りや、福島に住んでいるからという関係性の薄さがあるのかもしれないと考えました。また、原発は悪い面だけではないという意見には、非常に納得しました。原発によって多くの雇用を生んだことや電力を供給できたことは事実です。

私自身は、原発の再稼働には反対です。なぜなら、対策をしたとしても事故が起こる可能性はゼロではなく、もし事故は起きた場合には、何世代と超えてその影響を受けることになるからです。現実問題難しいのはそうですが、反対意見を挙げることの意味は、こうした部分にあるのだと思います。難しいからこそ考えるべきであり、そこに妥協は必要ないのではないでしょうか。

今回こうして福島大学の大学生の方々と交流でき、自分自身はどうなのかと考える機会となりました。原発問題は今後の私たち世代、その次の世代と考えていかなければならない課題であると同時に、こうして同世代間で意見を共有できたのはその小さな一歩なったのではと思います。普段からももっと固い場ではなくこうした内容を話せる場ができればと思いました。